
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ〜全てを見通す氷の目〜

【Nコード】

N6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら「キセキの世代」によって目立つことのなかった存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いです、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超え、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

「I」が「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

”誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が

一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた”

そしてもう一つ、

”公式の試合においては目立たず
華やかな記録が有るわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた”

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれませんがご容赦ください。

「わー……」(前書き)

短いですが1話目投稿です。

「じわーーーー!!」

―私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活動勧誘の
声飛び交っていた。

「ラグビー興味ない?!」

「日本人なら野球でしょ!」

「将棋とかやったことある?」

「水泳!チヨーキモチイ!」

手当たり次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん?ラッセル車持ってこい!それかブルドーザーでガーツ
と!」

「10分で5mも動けねえ…。ってか、キレすぎだろ」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。

…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした
効果はなかったが。

「勧誘か・・・くだらない。部活動とは自分からやろうという気持
ちがなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のな
んと無駄なことか。」

聞こえていたら印象が悪くなりそうなセリフを平気でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。

白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃけ怖すぎて誰も近づくものはい
なかった。

「バスケットはどこだ・・・」

「バスケット部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは・・・出身中学と動機？」

「あ、そこら辺は任意だからどっちでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まった入部届を数えていた。

「つと：今10人目か。もうちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張って有望そうなの連れてきてよねー）」

「連れて・・・きました。」

と、思った直後男子部員が1人泣きながら帰ってきた。

「（連れて・・・これとるやんけー?!しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力!!こいつ何者!?)っで、知ってると思うけど・・・」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によって遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動揺しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ!?!本場仕込みってワケ。火神大我君か、タダ者じゃなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ...?志望動機はなし...?」

その呟きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどこも一緒だろ。」
そう言い捨て火神は去っていった。

「すみません、バスケ部のブースはここでいいのでしょうか？」

「・・・あっ！ごめん。そうよこ、こが・・・」

そうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たときたん声のとぎれる。

「（こわーーーー！！）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願いします。」

「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「こわーーーー！！あれで新入生！？」

「（虎の次はオオカミか。猛獣使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるっすよ。」

「え？あ、ごめん、ありがとう」

そう言われ紙を受取りつつ名前を確認するとそこには”黒子テツヤ”の文字。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」

と、不思議に思いつつ紙に目を通していきある1点で止まった。

「って帝光バスケット部出身！？って、さっきの白髪も！？今年1年つてことはキセキの世代の！？」

「さっきのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイ！？」

先輩に騒がれているとは露知らず渦中の1人である黒子テツヤはあ
る場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」

「すみません。」

お互いに口数が多いとはいえない2人。しばらくにらみ合って、最
初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケットを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭にでたものだ。この新設校でおまえの新しい光
を見つけられるとでも？」

「……」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせず安堵している。
これからともに頑張ろうじゃないか。」

「はい、よろしく願います。」

「ではまた明日。」

「さようなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじっとその場を動かないで、頭の中ではいろいろ
と考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだろう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだろう
だけどなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘
はきていたはずだ

僕と同じ考え？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
とっていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだろう。そう結論付けて帰路につい
た。

「バスケットブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男
子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思ってるこ
とじゃん。」

「そうなんだけど・・・」

「あれ？こういう考え持つてる奴って好きじゃなかったっけ？」

「なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄にはこう書いてあった。

「完全な勝利を手にするために」

くNGシーンく

「ええっ!?!」

「うおっ!?!なにになに!?!」

「ねえ、これどう思う?」

「なにになに・・・」「誠凜の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ!?!意外とロマンススト!?!」

「しょうもない運命だわね・・・」

「わー！ー！ー！ー！」（後書き）

いかがでしたか？感想もらえるとうれしいです。

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・」
（前書き）

少し長くなりました。

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」

翌日

体育館にて・・・

「よし全員揃ったなー、1年はそつちな」

2年生の声で順に並んでいく。

「なあ、あのマネージャー可愛くねー？」

「2年だろ？」

1年生の視線の先には昨日のショートカットの女生徒。

「けど確かに！もうちょい色気があれば・・・」

「だアホー違うよ！」

「あいて！」

バキキツと後ろから突っ込んできたのは眼鏡をかけた先輩。

・・・

「男子バスケット部カントク、相田リコです。よろしく！」

そう言ったのはマネージャーだと思われていた彼女。

「ええ〜！！？（カントク！？）」

1年生の叫びがあがる。

「うるさい……。」「
誠は不機嫌だった。

(あっちじゃねーの!?)

1年生の視線は体育館の端にいる杖をついたヨボヨボのじいさんの
もとへ集まる。

「ありゃ顧問の武田センセだ。見てるだけ」

1年生の心情を察してか相田が言う。

動揺する1年生に相田は更なる爆弾を投下した。

「……。じゃあまずは、シャツを脱げ!」

「えゝえゝゝゝ!?!?(なんで!?)」

「監督権限使った変態行為、なんとも嘆かわしいことだ……」

「そこおっ!!誤解を招くこと言わないっ!!」

しつかり聞こえていたようだった。

そして、言葉通り、上半身裸にされた1年生男子諸君。

はたから見れば異様な光景だ。

「……。なんだコレ……」

その言葉は至極当然な意見だろう。相田は1年生の前を歩く。

「キミちよつと瞬発力弱いね。反復横飛び20sec/50回位でしょ？バスケやるならもうチョイほしいな。キミは体力タイ、フロ上がりには柔軟して！」

次々と指示を出して行く。

「マジ・・・！？合ってる・・・」

「どゆこと！？」

「てか体見ただけで・・・？」

1年生の疑問に先ほどの眼鏡の先輩が答える。

「彼女の父親はスポーツトレーナーなんだよ」

データをとつとトレーニングメニューを作る。毎日その仕事場で肉体とデータを見つけてるうちに身に付いた特技。

【体格を見れば彼女の眼には身体能力が全て数値に見える】

「（なるほど・・・学生で監督を任される力は持っているという）とですか。」

少し感心した。しかし上半身裸の男をジロジロみているその姿は、知らない人が見れば十分怪しい。

「！」

次にカントクの眼に止まったのは・・・

「・・・なんだよ？つか寒みーんだけど」

ほかの1年生に比べて頭一つ高い身長を持った男だった。

「（な、なにコレ！？すべての数値がズバ抜けてる・・・。こんな
の高一男子の数値じゃない！！しかものびしろが視えないなんて・・・
、これは・・・天賦の才能！！うっわ生で初めて見る）」

目を光らせて涎まででていた。

「今の姿をみて変態だと思わない方が難しいと私は思う。」

「キミさつきから失礼ねっ！って、おお・・・」

「（さつきのやつと比べると若干劣るけどこっちの数値もズバ抜けてる！！のびしろも視えない・・・こんな才能が2人も入ってくるなんてラッキー）」

「カントク！いつまでポーツとしてんだよ!!」

はっと気づいて、慌て口の端の涎を拭う。赤い目であきれたような視線を向けられ少し心が痛い。

「ごめんっつでえっと・・・」

「全員視たっしょ。そいつでラスト」

「あっそう？・・・ね？」

相田はどこか不思議そうにしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・黒子君と白崎君がこの中にいるっ。」

この一言に2年生は沸きだつた。

「あ！そつだ帝光中の・・・・」

「え！？帝光つてあの帝光！？」

「黒子！！白崎！！！」

「黒子、白崎いるー！？」

「（あれー？あんな強豪にいたんなら視りやすぐわかんと思つたんだけど・・・・）今日は休みみたいね。いーよじゃあ練習始めよう！」

「あの・・・・すみません」

そう言う相田の前には人影が・・・・・・・・

「黒子はボクです」

「白崎は私です・・・・」

・・・・・・・・。。。

「きゃあああ!?!」

その悲鳴に他の人達もそつちを見る。

「うわぁ!何?.....うおっっ!?!ダレ?」

「いつからいたの!?!」

「最初からいました」

「ウソオ!!!?」

「私に至ってはさつきガン見されていたのだが.....」

「(目の前にいて気づかなかった.....!?!?.....え?今黒子って言った!?!ええ!?!?てゆーか.....カゲ薄っすっっ!?!そしてそーいえばこの白髪赤目!?!なんで忘れてた私!?!?)」

「.....え?じゃあつまりコイツらが!?!『キセキの世代』の!?!?」

「まさかレギュラーじゃ.....」

3人のやりとりを見ていた部員は黒子と白崎に目をやった。

そしてざわざわと騒ぎだす。

「それはねーだろ。ねえ黒子君、白崎君。」

眼鏡の先輩が2人に同意を求めた。帝光のレギュラーがここにくる

わけがないという思いか、黒子の見た目からありえないと思ったか。だが、2人の返答は・・・

「・・・？試合には出てましたけど・・・」

「控えとしてですが出ていました。」

といった。

「だよなー・・・うん？」

「え？・・・え！？」

「えゝゝえゝゝえゝゝゝゝゝゝ！？」

先ほどよりも更に大きな叫びがあがる。

「「「（信じらんねえゝゝ！！！！）」」」

「そこまで驚くことないでしょう。レギュラーでなくとも試合には出られるのですから。」

「あ、ああ・・・すまん」

謝りはするがどこか納得してないようだ。

「ちよっ・・・シャツ脱いで！！」

「え？着ちゃった・・・」

監督に言われてシャツを脱ぐ黒子。

「（身体能力をみたところで意味はないだろう、黒子の能力には関係がない。）」

そんな事を考えつつ、こちらに集まる視線を受け流す。

しばらくみていたがやっと黒子の身体検査は終わったようだ。

「（……………！？）オイちょっと聞きたいんだけど……………帝光中とかキセキのなんたらとか」

デカイ赤髪が男子生徒に何か聞いていたが興味がないので無視していた。先輩たちの話を聞いてその日は解散となった。

（MAJIEバーガー）

そこには火神がいた。…………トレーに山積みになったハンバーガーを持って。

「（『キセキの世代』ね……………、そいつらならもしかして……………」

そんな事を考えながら席につくと目の前には…………

「ぐおっっ！？」

「どっつも……………育ち盛りですね」

本を片手にシエイクを飲む黒子の姿があった。

「どっから・・・つか何やってんだよ？」

「ボクが先に座ってたんですけど。人間観察してました」

「（こんなのが日本一の・・・！？・・・つか、は？・・・人間観察！？）」

火神は怪訝な顔をした。

・・・

「それより、ちょっとシラ貧せよ。これ食ってから」

火神はそう言った。

（相田 said）

・・・あれはどーゆーこと？

彼は何者なの？

能力値が低すぎる・・・！！

全ての能力が平均以下・・・

しかもすでにほぼ限界値なんて・・・

「・・・けどさつきいい事聞いたぜ。同学年に「キセキの世代」って強え奴らがいるらしいな。オマエはそのチームにいたんだろ？」

火神はそう言うと、バスケットボールを黒子に渡した。

「オレもある程度は相手の強さはわかる。ヤル奴つてのは独特の匂いがすんだよ・・・白崎つていったか？あいつはスゲー、強いやつ
の匂いがブンブンしゃがる。が、オマエはオカシイ。弱けりゃ弱いなりに匂いはするはずなのに・・・オマエは何も匂わねー、強さが無臭なんだ。確かめさせてくれよ。オマエが・・・『キセキの世代』つてのがどんだけのもんか」

火神の目はますます獣じみたものになる。

「・・・・・・奇遇ですね」

ここに来て初めて黒子が声を出した。

「ぼくもキミとやりたいと思ってたんです。1対1」

黒子が学ランを脱いだ。

そして、勝負が始まった。

が、

「はあ！？）　　しっ・・・死ぬほど弱ええええ！！！」

黒子はシュートしても入らなかったりドリブルミスしたりあっさりボールを奪われたり、早い話が弱かった。

現在、火神16対黒子0

「（体格に恵まれてなくても得意技極めて一流になった選手は何人もいる。けどコイツはドリブルもシュートも素人に毛が生えたようなもん・・・取り柄もへつたくれもねえ・・・話になんねー!!!）」

「ふざけんなよテメエ!!! 話聞いてたか!? どう自分を過大評価したらオレに勝てると思っただんだオイ!!!」

ついに火神がぶちギレた。

「まさか」

それに黒子は飄々と返す。

「火神君の方が強いに決まってるじゃないですか。やる前からわかってます」

なに言ってるんだコイツ、とでも言いたげな顔であっさりとな

「ケンカ売ってるのかオイ・・・! どういうつもりだ!」

火神が怒りに震えて怒鳴る。

「火神君の強さを直に見たかったです、あと Dank も」

「...はあ!?!」

そんな火神にもひるむことなく黒子は続ける。

「(つつたく・・・どーかしてたぜオレも・・・。ただ匂いもしねーほど弱いだけかよ・・・。アホらし・・・)」

「あの・・・」

「あーもういいよ。弱え奴に興味はねーよ。・・・最後に一つ忠告してやる」

火神は黒子を軽くあしらい荷物をかついだ。

「オマエバスケやめた方がいいよ。努力だの何だのどんな綺麗事言っても世の中に才能ってのは厳然として“ある”。オマエにバスケの才能はねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それはいやです」

「・・・・・・・・・・!?!」

火神の遠慮のない言葉に黒子は黙ることなく返す。

「まずボクバスケ好きなんで。それから、見解の相違です。ボクは誰が強いとかどうでもいいです」

「なんだと・・・」

この言葉に火神は怒ったように返す。

「ボクはキミとは違う。ボクは影だ」

「・・・・・・・・・・？」

火神は言葉の意味を理解していない。

黒子はそれ以上はなにも言わずに夜道を歩いて行った

翌日、外は雨が降っていた。

「ロード削った分練習時間余るな・・・・・・・・・・どーする？カントク」

「（一年生の実力も見たかったし・・・・・・・・）ちょーどいいかもね。5
対5のミニゲームやろう！一年対二年で」

「センパイと試合って・・・・・・・・・・！」

「覚えてるか、入部説明の時言ってた去年の成績・・・・・・・・去年、一年
だけで決勝リーグまで行ってるって・・・・・・・・・・！！！」

「マジで・・・・・・・・・・！？」

「フツーじゃねえぞソレ・・・・・・・・・・」

先輩達の実力を聞いて、一年はビビっていた。

「（・・・・・・・・・・さ〜〜て、ルーキー達はどこまでやれるかな？）」

「ビビるとこじゃねー。相手は弱いより強い方がいいに決まってるん

「だろ！行くぞ！！」

「何ともイノシシらしい思考で・・・」

「なんか言っただかコラア！」

そして始まった一年対二年の試合・・・

「・・・・・・・・っおっっ」

ガッン！

「おおっ！！？」

「うわぁマジか、今のダンク」

「スゲー！！！」

一発目から火神はダンクで先制した。

「・・・・・・・・！！（想像以上だわ・・・・・・・・！！あんな粗けずりなセンスまかせのプレイでこの破壊力・・・・・・・・！！）」

「とんでもねーなオイ・・・・・・・・（即戦力どころかマジで化物だ・・・・・・・・！！）」

試合は進み現在11-8、一年がリードしていた。

「一年がおしてる！？」

「つーか火神だけでやってるよ！」

「（んなことより……クソツツ、神経逆なでされてしょーがねー……）」

火神の機嫌が悪い理由……それは。

バチツ

黒子は持っていたボールを弾かれあっさりと奪われてしまった。

このやり取りは試合が始まってからずっと続いている。

「ステイール！？またアイツだ！」

「しっかりしろー！！！」

「（意味深な事喋ってた割にクソの役にも立ちやしねえ……ザコのくせに口だけ達者つーのが……）一番イラつくんだよー！！！」

イライラしながら火神はジャンプしてボールを弾いた。

「（そして何だアイツはっ！試合始まってからろくに動いてねー……この程度かつまらねえ）」

火神は試合開始からほとんど動かない白崎に対して失望したようだ。

「……！！！」

「高っ……………」

「もう火神止まんねー!!」

「……………わけにはいかなーなー(怒)そろそろ大人しくして
もらおうか!」

キュツツ!!

「3人!?!」

これ以上はやらせないと火神に三人のマークがついた。なぜか顔が
怖い。

「つまらねえとは言ってくれるじゃないか……………」

「先輩なめるなよ……………」

「……………(怒)」

「ええっ!? 違っ!(汗)」

さっきのこの程度発言で怒らせたようだ

「そこまでして火神を……………」

「しかも……………ボールを持ってなくても2人……………ボ
ールに触れさせもしない気だ!」

火神が押さえられた結果、試合の流れはあっという間に逆転し15
- 40と一気に点差をつけられた。

「流石先輩達……強いね」

「てゆうーか勝てるわけなかったし……」

「もういいよ……」

諦めの言葉を呟いた相手に火神は突っかった。

「……もういいって……なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」

黒子は火神を宥めるため膝カックンを実行した。

「……!?!」

「手ぬるい、後頭部にハイキックを放て」

「テメ……そして殺す気がっ!?!」

宥めるどころか更に揉め事がヒートアップした。

「なんかモメてんぞ」

「黒子か……そーいやいたな〜」

「（審判の私も途中から忘れてた……んん!?!あれ?!マジ
でいつからだっけ!?!……まさか）」

「すみません、適当にパスもらえませんか」

「は？」

「（ようやくか・・・）黒子、こっちも準備はできた。必要か？」

「・・・よろしく願います」

「がんばれ、あと3分！」

「（てか、もらっても何ができんだよ？せめてボール取られんなよ
〜〜）」

ボールが黒子に手に渡った時、空気が変わり始めた。

「（この違和感は何に・・・？もしかして・・・何かとんでもない事が起きてる・・・！？）」

次の瞬間、黒子が持っていたボールはゴール前にいた9番へとパスされていた。

「・・・え・・・あっ」

ボールに気づくと9番はすぐにシュートを決める。

「・・・え」

「・・・な」

「入っ・・・ええ！？今どーやってパス通った!？」

「わかんねえ見逃した!!」

その後、誰も黒子のパスは止められず流れは再び一転し始めた。

「どーなつてんだ一体!!?」

「気がつくとパス通つて決まってる!？」

「……! (存在感のなさを利用してパスの中継役に!?しかもボールに触ってる時間が極端に短い!!……じゃ彼はまさか……元のカゲの薄さを……もつと薄めたつてこと……!?)」

「ミスディレクション……手品などに使われる人の意識を誘導するテクニック。」

ミスディレクションによって自分ではなく、ボールや他のプレーヤーなどに相手の意識を誘導する。

つまり 彼は試合中『カゲが薄い』と言うよりもつと正確に表現すると、自分以外を見るように仕向けている。

「こちらも動きますか……9番、5番が4番ヘルプパスをしようとしています。4番は3Pの準備をしています、打たせないで。」

「ええっ!？」

「なっ!？」

全員が驚いた。体制を崩しながらも5番の先輩が4番へパス、4番の位置は3Pライン……驚いて打てなかったが、ほとんど当たっ

ていた。

「（・・・始まりましたか）」

「12番、後ろへパス。13番へのパスは8番からスティールを狙われています！」

自らパスを受け取り、ゴールにせまる。8番の先輩が驚いているのを見るとまた的中。

「何でわかるんだ!?!」

「しかも全部!?!」

「このシュートは入ります!リバウンドはいりません、戻って!」

「3Pシュートだぞ!?!」

外す確率の高い3Pにも迷わず戻る指示をだす。ボールは見事ネットを通過していた

「（これが黒子と白崎の……!!）」

弱いと思っていた二人がこれ程の実力を持っていたという事に火神は驚きを隠せなかった。

「（元帝光中のレギュラーでパス回しに特化した見えない選手……!!）噂は知ってたけど実在するなんて……!!）『キセキの世代』幻の6人目!!そして白崎君……彼は多分、全てのプレイを見抜きゲームを完全に掌握する……』神の守護者』

「!!」

「あッ!!」

「(しまっ……黒子のパスと白崎の指示に気をとられすぎた……!!)」

「火神!!」

火神のマークが甘くなった事により、再び火神が得点を稼ぎ44-45と一気に追いつけた。

「うわあ!!信じらんねエ!!」

「一点差!?!」

「まったく、どっちか片方でもシンドイのに……更に白崎も混ざるとなると(三人組んだ時のこの獰猛さは手がつけらんねーな)」

「っち!!」

「バツ……」

ボールがパスされた先には黒子が待機しており、ボールの奪取に成功した。

「うおお!!」

「いけえ黒子!!」

ゴールに近づき、黒子はシュートを決めに行く。

「勝つ……」

「無理です。」

誠以外勝利を確信したが……

ガボン……

ボールはゴールに入らなかった。

「黒子にパス以外のことを任せてはいけません」

「……だから弱ええ奴はムカツクんだよ。ちゃんと決めろ
タコ!!!」

ガンツ！

火神が最後にダンクを決めて、一年の勝利が決まった。

「うわあああ!」

「一年チームが勝ったあ!?!?」

「ははっ(まあ……味方なら頼もしい限りってことか……」

こうして本日の部活は終了した。

（MAJエバーガー）

「・・・・・・・・」

火神が座る席には黒子と白崎の姿があった。

「・・・・・・・・何でまたいんだよ・・・・・・・・」

「ボク達が座ってる所にキミが来るんです。好きだからです、このバニラシェイク」

「私は黒子に話があるというからつきあっているだけだ。ちなみにこれは爽健美茶だ。」

飲み物を飲みながら対応する

「どっか違う席行けよ」

「いやです」

「黒子次第だ」

「仲いいと思われんだろが・・・・・・・・」

「だって先座ってたのボク達ですもん」

「・・・・・・・・ホラよ」

火神はトレイに積み上げられたハンバーガーを二つ取り、黒子と白崎に投げ渡した。

「？」

「一個やる。バスケ弱い奴に興味はねー。が、オマエのこと、それ一個分位は認めてやる」

「……………どうも」

「悪いが私はいらない、栄養摂取にも気を使っているのね。ジャンクフードは食べる気になれん」

「どこのジジイだよ……………」

「ジジイではない！体のことを考えるのはスポーツ選手として当然のことだ！」

「夜9時に寝て、朝5時に起きて乾布摩擦する人がですか？」

「ジジイじゃねーか！！」

「……………キセキの世代」ってのはどんぐらい強えーんだよ
「？」

「「？」」「」

「じゃあオレが今やったらどうなる?」

「……瞬殺されます」

「馬鹿は人に勝てん」

黒子と白崎は即答で断言した。

「もつと違う言い方ねーのかよ……おいこら、白崎!! おまえ人外のバカだと言いてえのか!? (怒)」

「ただでさえ天才の5人が今年それぞれ違う強豪校に進学しました。まず間違いなくその中のどこかが頂点に立ちます(うちも可能性がないわけでもありませんが……)」

「……ハッ、ハハハ」

「壊れたか?」

「いいね、火イつくぜそーゆーの……決めた! そいつら全員ぶっ倒して日本一になつてやる」

「ムリだと思えます」

「冗談は髪だけにしとけ」

「うおいつ!!! って、白髪のおまえに言われたくねーよ!!!」

それぞれの飲み物を飲みながら、二人は即答で言い切った。

「潜在能力だけならわかりません。でも今の完成度では彼らの足元

にも及ばない」

「今のおまえは少し高い位置にいるだけ。本物の化け物にはほど遠い」

「・・・ボクも決めました。ボクは脇役（影）だ・・・でも影は光が強いほど濃くなり光の白さを際立たせる。主役（光）の影として、ボクも主役を日本一にする」

「私はバスケットで勝つためにここに来た。化け物には及ばないが、少しはマシなおまえが使い物になることを期待する」

「・・・ハッ、言うね。勝手にしろよ」

「頑張ります」

「わかった、勝手にしよう」

（NGシーン）

「・・・もういつて・・・なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」（膝カックン）

「黒子はボクです」 「白崎は私です・・・」 (後書き)

どうでしたか？感想も聞けると嬉しいですよ。

「月曜朝8：40の屋上ね！」（前書き）

白崎の目的がわかります

「月曜朝8：40の屋上ね！」

（朝の教室）

「お〜い白崎。」

「降旗君、でしたか？何かご用ですか？」

「おつ、名前覚えてくれたのか。おまえ本人部届もらった？」

「いえ、まだですが。」

「じゃあもらってきた方がいいぞ。俺らまだ仮入部状態だから試合には出られないらしいからな。2・Cの監督のそこ行けばもらえるから。」

「そうなんですか、教えてくれてありがとうございます。」

「どういたしまして。・・・なあ、敬語やめない？」

「すみませんね、初対面の人にはどうしてもこうなってしまっんです。」

「あれ？火神は？最初から敬語じゃなかったけど。」

「なに言ってるんです？山猿は人ではないでしょう。」

「ひびっ！..?」

く2-C・昼休みく

「失礼します、相田リコ先輩はおりますでしょうか？」

「・・・普通だ。」

「はい？」

「いや、さっき立て続けにびっくりしたから、つい。」

「はあ・・・あの二人と一緒にしないでください。大方、火神が大声で「監督！！本入部届けくれ！！」といつて勢いよくドアを開け放って、黒子は直前まで気配消して「・・・本入部届け下さい。」とでも言って、驚いて牛乳吹いたというところでしょうか？」

「そこまでわかるあなたの方が驚きだわ！？」

「二人の性格と少し残った牛乳の臭いから考えればすぐわかります、用件は二人と同じです。」

「はー・・・じゃあこれ、本入部届けね。あ、受け取るのは月曜朝8：40の屋上ね！」

「・・・その時間は朝礼が始まる直前ですが？」

「あら、覚えてた？まあ、そのときのお楽しみってことで。」

その場では聞き出せないとあきらめて2-Cを後にした

「ん？あそこにいるのは……」

教室に戻る途中、そこには掲示板に貼られた誠凛学生新聞を見る火神と黒子がいた。

「へー、ここのバスケット部って結構すげー……のかな？」

「すごいですよ。」

「……………!!!」

突然現れた黒子に火神は声も出ないくらいビックリした。

「テメーは！フツーに出ろ！！イヒョーをつくな！！！」

「おまえも静かにしろ、図書室前で大声は関心できない。」

「なっ！？コイツがビックリするよつなことから……!!!」

その横でしーっ、と口に人差し指を当てて火神を注意する黒子。

それを見て火神はついにキレた。

「おちよくってんのか？おちよくってんだよな？オイコラ！」

「……………違います。」

「やばい音が出ているぞ。」

火神は黒子の頭を鷲掴みして握り潰す勢いで握っていた。

「（マジ信じらんねー。普段はカゲ薄いだけのコイツが……バスケじゃ幻の6人目なんて呼ばれてるなんて……白崎は「キセキの世代」と同じくらい強いって話だし……）」

「白崎君は監督のところに行ってきたんですか？」

本人部届けに視線を向けていう黒子

「ああ、おまえは日常ではもっと存在感を出せ。周りが迷惑する。」

火神が考え事をしてる間に二人は話ながら教室に帰る。

「（……そーいやなんで？他の「キセキの世代」はみんなもっと強豪に行ったんだよね？なんでコイツらは行かなかったんだ？）おい黒子、白崎……」

火神が振り返った時には黒子と白崎の姿は当然ない。

「どーでもいいかそんなこと……まずは……（次会った時ブツ殺そう……）」

メギギ……と音を立てながら火神は手すりを破壊した。

（翌日・月曜 8:40）

「フッフッフ、待っていたぞ！」

屋上では腕を組みながらカントクが待機していた。

「・・・・・・・・アホなのか？」

「決闘？」

「これだけの人数に一人で勝てるなどと思うまい。」

「つい忘れてたけど・・・・・・・・月曜ってあと5分で朝礼じゃねーか！」

本日月曜は学生の恒例行事、朝礼である。

「とつとと受けとれよ。」

「その前に一つ言っとくことがあるわ。去年、主将にカントクを頼まれた時約束したの。全国目指してガチでバスケットをやること！もし覚悟がなければ同好会もあるからそっちへどうぞ！！」

「・・・・・・・・・・は？そんなん・・・・・・・・」

「アンタらが強いのは知ってるわ。けどそれより大切なことを確認したいの。どんだけ練習を真面目にやっても、「いつか」だの「できれば」だのじゃいつまでも弱小だからね。具体的かつ高い目標とそれを必ず達成しようとする意志が欲しいの」

カントクの表情は真剣そのもので、バスケットに対する熱意が感じられた。

「んで今！ここから！！学籍番号！名前！今年の目標を宣言してもらいます！ちなみに私含め今いる2年も去年やっちゃったっ さら、できなかつた時はここから今度は全裸で好きなコに告ってもらいます！」

『えゝゝゝゝ！！？』

最後の爆弾発言に一年全員が叫んだ。

「・・・・・・・・・・は？」

「（はあ！？聞いてねー）」

「（いや勧誘の時言ってた・・・・・・・・！！）」

「（けどまさかここまで・・・・・・・・！！？）」

「さっきも言ったけど具体的に相当の高さのハードルでね！」「一回戦突破」とか「がんばる」とかはやり直し！」

「（どうしよう・・・・・・・・・・てかマジかよ！？）」

「（しかもコレあとで絶対オコられるぞ）」

ほとんどの一年が戸惑う中、火神は平然とした顔をしていた。

「ヨユーじゃねーか。テストにもなんねー」

火神は柵の上に飛び乗り、早速カントクの指令を実行した。

「1 - B 8番！火神大我！！」「キセキの世代」を倒して日本一になる！」

火神は楽々とカントクの指令を完了。

「次はー？早くしないと先生来ちゃうよ（つてアレ？黒子君もダメ？白崎君は・・・）」

「仕方ないですね・・・早めに済ませた方がよさそうです。」

あまり乗り気ではなさそうだが、柵の前に移動して声を発する。

「1 - A 12番！白崎誠！！」「キセキの世代」を完全に沈黙させる！！」

大声で叫びさつさと戻る。

「これでよろしいですか？」

「まっ、OKかな。次は？」

「すみません、ボク、声張るの苦手なんで拡声器使ってもいいですか？」

監督の真横に拡声器を持った黒子が登場。

「・・・いいケド」

そしていざ目標を叫ぼうとしたその時・・・

「コラー！！またかバスケ部！！」

「あら今年は早い！？」

屋上に先生が現れ、バスケ部一同はしばらく説教を受ける結果となった。

（MAJバーガー）

「ちょっと大声出したぐらいであんな怒るかよ？」

「未遂だったのにボクも怒られました……………」

「仕方ないだろう、あのような勝手なまねをすれば怒られて当然だ。」

「ズーン、と落ち込む黒子と、白崎の存在に気づき、火神は驚き飲み物を噴き出した。」

「……………店変えよーかなー」

「……………あと困ったことになりました」

「ホントだよ……………ああ！？何！？」

「いきなり約束を果たせそうにないです」

「は？」

「なんかあれから屋上、厳戒態勢しかれたらしくて。入部できなかつたらどうしましょう」

「それはない、私と山猿だけなど考えるだけでおぞましい。」

「失礼にもほどがあるぞコノヤロー……それより一つ気になつてただけど、そもそもオマエらも幻の6人目やら神の守護者なんて言われるぐらい有名だろ？なんで他の5人みてーに名の知れた強豪校に行かぬーんだ？」

一番疑問に思っていた事を火神は二人に向けて質問した。

「オマエらがバスケやるのには……なんか理由あんじゃねーの？」

「……ボク達がいた中学校はバスケ強かつたんですけど」

「知ってるよ(怒)」

「そこには唯一無二の基本理念がありました。それは……」

「勝つことがすべて」

それが帝光の方針であり、そのために必要だったのはチームワークなどではなく、ただ「キセキの世代」が圧倒的個人技を行使するだけのバスケット。

それが最強……でもそこには「チーム」というものが一切なかった。

「6人は肯定してたけどボクには……何か大切なものが欠落してる気がしたんです」

「……で、なんだよ？そうじゃない……オマエのバスケで「キセキの世代」倒してもすんのか？」

「そう思ってたんですけど……」

「マジかよ!？」

「……」

「それよりこの学校でボクは……キミと先輩の言葉にシビれた。今ボクがバスケをやる一番の理由は……君とこのチームを日本一にしたいからです」

「相変わらずよくそんな恥ずかしいセリフばっか言えんな！てかどっちにしろ「キセキの世代」は全員ぶっ倒すしな。白崎はどうしてだ？」

「私は昨日も言ったが、勝つためにここへきた。「勝つことがすべて」という帝光の方針にはもちろん賛成している。」

「そっぴゃさつき6人って……じゃあなんで強豪校に行かなかったんだ？誠凛より強いとこなんていくらでもあるだろ？」

全然わからない、という様子の火神。

「簡単なこと、私の求めているのは「勝利」ではなく「完全勝利」。

帝光時代、すべての試合で勝利した・・・だが、私の力が必要だったかと問われると肯定はできない。」

「は？あんな未来予知みたチカラ使えれば・・・」

「強すぎた・・・ということですか？」

火神の言葉を黒子が遮り、白崎が頭を縦にゆらした。

「そう、「キセキの世代」5人の力があればそれで十分。私は良く言えば勝利を100%にできる選手、だが実際は余剰戦力ではなかったと思う。接戦なんてものは数えるほどしかなかった。」

「キセキの世代」5人が試合をすればダブル、トリプルスコアは当たり前。途中で相手が戦意消失して試合の結果が終了前に決まるなんていうのが当たり前だった。」

「ゆえに、私の力を持って勝利する。どうせなら無名の学校で強豪を倒す。それを成せば私自身満足する結果が得られるだろう、それが理由だ。」

「なるほどな・・・」

「もちろん、危ない試合を救ったこともある。無敗の栄光を守る守護者なんて意味の二つ名ももらった。」

1軍だけでなく、2軍以下も負けが許されなかった帝光。その試合へ同行し、危ない時は窮地も救った。無敗伝説を守った誇りもある。しかし、すべて格下・・・十分満足はできなかった。

「もし、私を倒す価値があると思うのならいつでも勝負を受けよう。すべてに勝利することに意味がある。」

おまえには負けない発言に火神は獣のような目で

「上等じゃねーか・・・その言葉忘れるな!!」

ガタツと音を立てて火神は席から立ち上がった。

「黒子、一つ言っておく」したい「じゃねーよ。日本一にすんだよ！」

大量のハンバーガーを残して火神は帰っていった。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。この意味をどう取るかはおまえ次第・・・もちろん受け取り方によつては私を許せないと思うかもしれない。」

「はい・・・」

「おまえに私の考えは受け入れがたいものかもしれない・・・だが、私は考えを変える気はない。」

「・・・・・・」

「ではまた明日、ずいぶん長いことしゃべってしまったな・・・私らしくもない。」

そういつて帰ろうとする白崎を黒子が捕まえる。

「ボクに全部押しつけないでください、どうするんですかこのハンバーガー。」

火神が置いていった大量のハンバーガーを指さして言った。

「仕方ない……」

ハンバーガーをどう処理したのかは二人のみが知る……

???「ハア!?!なんだこのバーガーの山!?!」

翌日、教室内はとても騒がしかった。

「なんだ騒がしいな」

教室にやってきた火神は窓側にできた集団の元へと近づいた。

「………ハッ!」

グラウンドを見ると、そこには「日本ーにします。」と白線で大きく書かれていた。

「黒子、名前はどつした……」

「あっ……」

後にこれは謎のミステリーサークルとして誠凛高校七不思議の一つとなるのであった。

放課後、バスケット部は練習に励んでいた。

「おい、カントクどした？練習試合申し込みに行くとか言ってたけど」

「さっき戻ったよ。なんかスキップしてたし。オツケーだったみたいスね」

「……！！スキップして!?!」

一年のその言葉を聞いて主将はギョツとした表情に変わった。

「オイ、全員覚悟しとけ。アイツがスキップしてるってことは……
……次の試合相手相当ヤベーぞ」

そして噂をすれば何とやら……鼻歌を歌いスキップしながらカントクがやってきた。

「あ、カントク……おかえりなさい」

「ただいまー!!ゴメンすぐ着替えてくるね」

そのまま更衣室に向かうかと思いきや、カントクはピタリと足を止めた。

「……………あとね、「キセキの世代」いる下口と試合……………
・組んじやつたっ……………」

爆弾を投下した後、カントクはスキップして去っていった。

「……………!」

「な?」

「……………!?!?」

「マジ……………!?!?」

「さて、誰がくるのやら……………」

みんな驚き(黒子含む)白崎は予想以上に早い再会に少しあきれた。

くNGシーンく

「1-A 12番!白崎誠!!!生徒会に入って部費を増額させる!

「！」

ズコーー！！（バスケット部員全員コケた）

「そういう意味の目標じゃないわよっ！？」

「月曜朝8：40の屋上ね！」（後書き）

次回キセキの一人登場です！

「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太（前書き）

一人目登場

「『キセキの世代』の一人、黄瀬涼太」

〈男子バスケット部・部室〉

「あれ？これって……………」

部室から一冊の雑誌、月刊バスケットボールと書かれたものが出てきた。

「この号、黒子と白崎が帝光いた頃のじゃん？」

「おー、一人一人特集組まれてるよ『キセキの世代』」

「黒子は……………記事ねーな。」

「6人目なのに……………取材来なかったの？」

「来たけど忘れられました。」

『（切ね ……！！）』

取材を忘れられたと聞いて、全員の心の声の一つになった。

「それに、そもそもボクなんかと6人は全然違います。あの6人は本物の天才ですから。」

「あ、これ白崎じゃね？」

「どれどれ……………『キセキの世代』には身体能力で一步劣る

ものの、彼が出場した時点で試合が決する。絶対不可侵の領域を作りあげる「神の守護者」……しっかりと載ってる……」

「ページまるまる掲載されていた。」

「あれ？そっぴいや本人いないな……どうしたんだ？」

「あつ、今日は担任から手伝い頼まれたから遅れるらしいです。」

同じクラスの降旗が思い出したかのように答えた。

「そっか……ってヤベツ！時間ないぞ！」

「全員早く着替える！練習量2倍になんぞ！」

それを聞いてあわてて着替え始めた。

同時刻、誠凛へと足を踏み入れる者がいた。

「おー、ここか誠凛。さすが新設校、キレーっスねー」

「見てあの人カッコイ〜」

「背も高………っでもしかしてあの人モデルの………」

キセキ同士の再会は今すぐ目の前に迫っていた。

ーキュツ キュツ ダムツ

その頃体育館ではゲームが行われていた。

黒子からのパスを受け取った火神は相手の右側をドリブルで抜いた。

「いやまだだ！くらいについて…」

そう誰かが言った瞬間、火神は体を逆へ切り返しダンクを決めた。

これには流石に相手も反応できなかった

「うおおー!!」

「ナイツシュー」

「すげーな、フルスピードからあの切り返し!!?キレが同じ人間とは思えねー」

「もしかしたら「キセキの世代」とかにも勝ってる……!!」
「？」

「あるかも!つかマジでいけんじゃね?」

「あんな動きそうそうできねーって。」

「むしろもう超えてる!?!」

先程のプレイを見て、黒子はふと以前自分が言った言葉を思い出し

ていた。

《今の完成度では彼らの足元にも及ばない》

「とは言っただけど……」

「あれ？黒子どこだ？集合って言ってるのに。」

「あーもー、たまにすげー困るよ。」

「黒子ー！！出てこーい！！」

はっと我に返り黒子は集合場所へと移動した。

「海常高校と練習試合！？」

「っそ！相手にとって不足なし！一年生もガンガン使ってくよ！」

「不足どころかすげえ格上じゃねーか……」

「そんなに強いんですか？」

「全国クラスの強豪校だよ。I・Hとか毎年フツーに出とる。」

『ええっ！？』

初めての練習試合が全国クラスの強豪校と知り、一年は驚くしかなかった。

「それよりカントク、帰ってきた時言ってたアレ、マジ？」

「もちろん！」

「アレ？」

「あれ火神聞いてなかった？」

「海常は今年「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太を獲得したトコよ。」

「(・・・・・・・・)「キセキの世代」!!)」

「ええっ!？」

「あの!？」

「(まさかこんなに早くやれるなんてな・・・・・・・・ありがてー!テンション上がるぜ!)」

「しかも黄瀬つてモデルもやってるんじゃないか？」

「マジ!？」

「すげー!!」

「カッコよくてバスケット上手いとかヒドくな!？」

「もうアレだな・・・・・・・・妬みしかねえ・・・・・・・・」

「ヒクツだな!」

ザワザワ……………

「……………!?ちょ……………え?」

気づけば体育館には女子の集団の列がズラリと並んでいた。

「何!?なんでこんなギャラリイできてんの!?!」

「あーも……………こんなつもりじゃなかったんだけど……………」

「……………アイツは……………」

「……………!!」(「キセキの世代」の……………なんで「」に……………!?)」

「……………お久しぶりです」

体育館の舞台上、そこにいたのは……………

「黄瀬涼太!!」

「ひさしぶり。スイマセン、マジであの……………え〜と……………
……………てゆーから5分待ってもらっていいスか?」

「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太だった。

「……………!!」(こいつが……………!!)」

「・・・・・・・・・・なつ、なんでここに!？」

「いやー次の相手誠凛って聞いて黒子っちが入ったの思い出したんで挨拶に来たんすよ。中学の時、一番仲良かったしね!」

「フツーでしたけど」

「ヒドッ!!!」

黒子はあっさりと仲良し説を否定した。

「すげー、ガッツリ特集されてる・・・・・・・・・・」

「どっから持ってきた。」

「部室っす。」

いつの間にも持ってきたのか、一年の一人が雑誌を読んでいた。

中学2年からバスケットを始めるも、恵まれた体格とセンスで瞬く間に強豪・帝光でレギュラー入り。

他の五人と比べると経験値の浅さはあるが急成長を続けるオールラウンダー、と黄瀬の事が紹介されていた。

「中2から!？」

「いやあの・・・・・・・・・・大ゲサなんすよその記事、ホント。「キセキの世代」なんて呼ばれるのは嬉しいけど、つまりその中でオレは一番下っばってだけスわ〜。だから黒子っちとオレはよくイビら

れたよ」

そうっすよねっ、と黄瀬は黒子に賛同を求めるが……

「ボクは別になかったです。てゆうかチヨイチヨイテキトーなコト
言わないで下さい」

「あれ！？オレだけ！？」

再びあっさりとはそれは否定された。そのとき……

「遅れてすみません、今から参加します。」

遅れていた白崎が到着した。

「その声……まさか白崎っち！？」

「ん？……おまえだったか……」

黄瀬は驚きの表情で白崎を凝視し、白崎は黄瀬を見るなりため息を
はいた。すると黄瀬は感極まった顔をして

「白崎っち……！！」

すごい勢いで突進する黄瀬。それを見た白崎は黄瀬に向かって走り
出す。

『えっ！？白崎ってそんなキャラだったけ！？』

みんなが感動の包容を予想した……が

(おまえなら耐えてくれると信じていたさ)「

「本音と建て前が逆っスよ!?!そして相変わらず容赦ないっスね!」

「完全な沈黙ってそういう意味!?!んな物騒なこと認められんわあ
あああー!?!?!?!(怒)」

そして白崎は逆エビの刑を受けたのであった。

「さて、それでなにをしにここに来た?」

「いや、そんな股下から顔出した状態で普通にしゃべんないでほし
いっス・・・」

逆エビの刑で曲がった状態から戻っていなかった。

「そんな事はどうでもいいんで早く続けて下さい。」

『(「そんな事?!?!」)』

「まあ、白崎っちなら不思議じゃないっスね。」

『(「不思議じゃないの?!?!白崎って一体・・・」)』

帝光組の会話にみんな驚いていた。

「黄・後ろ・球」

「!?!」

バチイ!

「つと!?!」

黄瀬に向かってボールが飛んできた。

「つた〜。ちよ……何!?!」

「せつかくの再会中ワリーな。けどせつかく来てアイサツだけもねーだろ。ちよつと相手してくれよイケメン君」

ボールを投げたのは火神であつた。

「火神!?!」

「火神君!?!」

「え〜そんな急に言われても……あーでもキミさっき……」

少し考えると、黄瀬は上着を脱ぎネクタイを外し始めた。

「よし、やるつか! いいもん見せてくれたお礼。」

「……!?!」

「（見たのか……）」

「白崎っち、ちよい持ってて。」

「仕方ない……そのかわり、おまえの全力を見せる。」

条件を付けて白崎は黄瀬から上着とネクタイを預かった。

「白崎っちに見られるのはマズイっスね……だからこそ燃えるっスけどね!!」

黄瀬は白崎の言葉でやる気満々になった。

「……っもう!」

「マズいかもしれません。」

「え?」

「黄瀬の能力、それは……」

白崎は目を細め、火神と黄瀬を見つめた。

そして始まった黄瀬と火神の1対1……

ーキュッ キュッ ダムッ

「彼は見たプレイを一瞬で自分のものにする。」

「相変わらず、完璧だ。」

「……………なっ!? (しかもこれって……………模倣とかそんなレベルじゃない!完全に自分のものにしてるなんて!!)」

「(ざけんな!それさっきオレが……………なのに……………ウソだろ!?)」

「うおっ火神もスゲー!!」

「反応した!?!」

火神も負けじとくらい付いていくが、力負けして弾かれてしまった。

「がっ……………!? (オレよりキレてて……………しかもパワーム!?)」

「これが……………キセキの世代……………黒子、白崎、オマエらの友達スゴすぎねえ!?!」

「……………あんな人知りません」

「へ?」

「正直さっきまでボクも甘いことを考えてました。でも……………数か月会ってないだけなのに……………彼は……………」

「これを予想できるのは……………私の知る限り一人しか思い浮かびません。そのくらい……………」

予想を遥かに超える速さで「キセキの世代」の才能は進化してる！

「ん〜．．．これは．．．．．ちよつとな〜」

「？」

「こんな拍子抜けじゃっば．．．．．挨拶だけじゃ帰れないスわ。」

黄瀬は黒子と白崎の方へと視線を向ける。

「やっば黒子っちと白崎っちください。」

『．．．．．！？』

「海常おいでよ。また一緒にバスケやろう。」

『．．．．．なっつ！？』

黄瀬の勧誘に黒子と白崎以外は目を見開いていた。

「マジな話、黒子っちのことは尊敬してるんスよ。こんなとこじゃ宝の持ち腐れだって。白崎っちも「キセキの世代」と同等の実力があるじゃないっスか。つか、敵にしたくないっス！こんな無名の学校じゃもつたないスよ！ね、どうスか。」

「そんな風に言ってもらえるのは光栄です。」

「そこまで評価してくれるのはうれしく思っ。」

二人のその気がありそうな発言に周囲は緊張するが……

「丁重にお断りさせて頂きます。」

「一昨日来い。」

「文脈おかしくねえ!？」

黒子はぺこりと頭を下げて、白崎は一言で勧誘を断った。

「そもそもらしくねっスよ!勝つことがすべてだったじゃん。なんでもっと強いトコ行かないの?」

「あの時から考えが変わったんです。なにより火神君と約束しました。キミ達を……」「キセキの世代」を倒すと。」

「何回目だこれ言うの……私は「完全勝利」を目指している。強い相手に勝ってこそ、それは証明される……おまえら「キセキの世代」をな。」

「……やっぱりらしくねースよ。そんな冗談言うなんて」

「……ハハッ(これが「キセキの世代」……スゲーわマジ……)」

「不気味な笑いが多いぞ。」

「ほっとけ!ったくなんだよ……オレのセリフとんな黒子(ニヤけちまう……しかもっと強えーのがまだ4人もいんのかよ!?)」

「冗談苦手なのは変わってません。本気です」

二人の様子を見て、白崎は小さく笑みを漏らした。

くオマケく

「そーいえば白崎っち！どーして行く学校教えてくれなかったんスか！？」

「おまえに教えて『同じところに行くっス！！』なんていわれると迷惑だからだ。」

「ひどっ!?!?」

くNGシーンく

「白崎っち、ちよい持ってて。」

「わかった………黄瀬涼太の上半身制服+ネクタイ、一万円からスタートです。」

「二万!!!」「三万!!!」「三万五千!!!!!!」

いきなり周りにいた黄瀬のファン相手にオークションを始めた。

「やめてええええー！！！！！！」

「なぜだ？新しい制服買えば得するだろう」「五万！！」「ほら、よかつたな。」

「そういう問題じゃないっす！！」

「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太（後書き）

次回、海常戦スタートです。

「最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる」(前書き)

今回は短めです。海常戦スタート

「最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる」

今日はいよいよ海常高校との練習試合……誠凛メンバーは海常へと足を踏み入れていた。

「おお〜広れ〜」。やっぱり運動部に力入れてるトコは違うねー。」

校内を見回すメンバーの中に目の下に隈を作り、更に充血までして
る者が一人いた。

「火神君、いつにも増して悪いです目つき……。」

「るせー。ちょっとテンション上がりすぎて寝れなかっただけだ。」

「……遠足前の小学生ですか。」

「コンディション管理もスポーツ選手の務めだろうに……倒れる
ような真似はするなよ。」

あきれた様子の二人、そこへ……

「どもっス、今日は皆さんよろしくっス。」

「黄瀬……!」

「広いんでお迎えにあがりました。」

校内に入ってすぐ、黄瀬が誠凛メンバーを出迎えにやってきた。

「黒子っちゅーあんなアツサリフるから……毎晩枕を濡らしてんスよも……」

どばー、と涙を流しながら黄瀬は黒子に近づいた。

「女の子にもフラれたことないんスよ……」

「……サラツとイヤミ言うのやめてもらえますか。ボクより白崎君はいいんですか？」

「ううー……白崎っちも遠慮も容赦もなしに一刀両断するんスもん……いくらオレだって傷つくんスよ……」

「押しつけるな黒子……おまえも今更そんなことで泣くんじゃない。」

白崎にへばりついてオイオイと泣く黄瀬、白崎は迷惑そうに引き離す。

「だから黒子っちにあそこまで言わせて、白崎っちが興味を持って
いるキミには……ちよつと興味あるんス。「キセキの世代」
なんて呼び名に別にこだわりとかはないスけど……あんだ
けハツキリケンカ売られちゃあね……」

すつと目を細め、黄瀬は火神を見つめた。

「オレもそこまで人間できてないんで……悪いけど本気で
ツブすつスよ。」

「つたりめーだ！」

そんな二人のやり取りを黒子と白崎は黙って見ていた。

「あと、オレらが勝ったら白崎っちはウチがいただくんで。」

『はあ！？』

「なぜ私だけだ、黒子はいらなのか？」

「巻き込まないでください。」

黄瀬の爆弾発言に白崎は黒子も道連れにしようとするも黒子は即否定した。

「黒子っちよりは可能性高そうっすから！」

「なんだそれは……………ハア……………勝てるのなら好きにするがいい……………」

「やっぱダメっす……………え？い、いいんですか!？」

驚きのあまり語尾が普通のものに変わる黄瀬。

「好きにしる……………面倒だ。」

『（それでいいのか白崎……!?!?）』

「あ、ここっす。」

「……………つて、え？」

体育館に到着し館内を見ると、信じられない光景が広がっていた。

「……………片面……………でやるの？」

コートのは半分はネットで区切られていた。

「もう片面は練習中……………？」

「てかコッチ側のゴールは年季入ってんな……………」

誠凛メンバーが自分の目を疑っていると、太った中年の男が近づいてきた、たぶん監督だろう。

「ああ、来たか。今日はこっただけでやってもらえるかな？」

「こちらこそよろしくお願いします……………で、あの……………
…これは……………？」

「見たままだよ。今日の試合、ウチは軽い調整のつもりだが……………
…出ない部員に見学させるには学ぶものがなさすぎてね。無駄を
なくすため他の部員達には普段通り練習してもらってるよ。だが調
整とは言ってもウチのレギュラーのだ。トリプルスコアなどになら
ないように頼むよ。」

あまりに見下した態度に全員が不満な表情……………中でも監督
と火神と白崎はヤバかった。

「(ナメやがって……………つまりは「練習の片手間に相手して

やる」ってことかよ……………」

「大変ありがたい配慮ありがとうございます。黄瀬、後でこっちにきなさい……………」(笑)「

「(顔が笑ってないっすよ!?)」

ただでさえ怖い顔の白崎が能面のような顔で怒気を発しているのにビビる黄瀬。

「……………ん?何、ユニフォーム着とるんだ?、黄瀬、オマエは出さんぞ!」

「え?」

「各中学のエース級がごろごろいる海常の中でもオマエは格が違うんだ。」

「ちよつ、カントクやめて。そーゆー言い方マジやめて。」

「黄瀬抜きのレギュラー相手も務まらんかもしれんに……………出したら試合にもならなくなってしまうよ。」

海常の監督の最後の言葉を聞いて、全員不満が爆発寸前になっていた。その中でも白崎は特にヤバかった。

「……………(笑)「

『(こええ!……!)』

赤い目を光らせ、黒いオーラが立ち上がるその姿は夜叉にしか見えなかった。

「すいません、マジすいません。大丈夫、ベンチにはオレ入ってるから！あの人、ギャフンと言わせてくれればたぶんオレ出してもらえるし！オレがワガママ言ってもいいスけど……オレを引きずり出すこともできないようじゃ……」キセキの世代「倒すとか言う資格もないしね。」

「おまえ……よく『コレ』相手に挑発できるな……」

火神がもはや人ではないなにかに変身しそうな白崎を指さしていった。

「後悔してるっス！（汗）」

「オイ、誠凛のみなさんを更衣室へご案内しろ！」

「アップはしといて下さい。出番待つとかないんで。」

「あの……スイマセン。調整とかそーゆーのはちょっとムリかと……」

「そんなヨユーはすぐなくなると思いますよ。」

「なんだと？」

「白崎っち……？」

黄瀬は更衣室へ向かおうとする白崎をおそろおそろ呼び止めた。

「ん？」

振り返った白崎は元に戻っていた。それをみた黄瀬は安堵した。

「よかったっス．．．あんだけ怒ったの久しぶりに見るっスから．．．」

「あれだけ見下されればな．．．相手に対する礼を欠くなどあり得てはならないというのに．．．」

「相変わらずっスね、そのスポーツマン精神は（笑）」

「当たり前のこと。『最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる』そうあるべきだ。ゆえに、怒りなどという、判断を鈍らせるだけのものを試合に持ち込むのは愚の骨頂。」

「おーい！！白崎！！早く着替える！！」

日向の叫びが聞こえてあわてて更衣室に向かった。

「それではこれから誠凜高校対海常高校の練習試合を始めます。」

試合に出る者はコート我真ん中に集まり一列に並ぶ。

「．．．．．や、あの．．．．．だから始めるんで．．．．．誠凜、早く5人整列して下さい。」

誠凜側には3人しかいなかった。

「つて!! あんたも行くのよ!!」

監督が白崎に向かって言った。

「はい? いや、しかし・・・」

「しかしじゃなーい! あんたもスターター、とつとと行く!」

監督に怒られてしぶしぶ白崎が並ぶ。

「いや、だから・・・あと1人・・・」

「あの・・・います5人。」

『・・・・・・・・おおえ!!?』

黒子の存在に気づき海常のメンバーは驚きの声を上げた。

「うおっ・・・・・・・・なんだアイツ!」

「薄っすいな〜カゲ・・・・・・・・」

「あんなんがスタメン・・・・・・・・!」

隣で練習していた部員も黒子のカゲの薄さに驚いていた。

「(うっわ、目の前にいて気づかなかったし・・・・・・・・あの白髪

は乗り気じゃなさそうだし……」

「(シヨボ……こりゃ10番だけだな要注意は)」

「(てかバスケットできんの!?)」

「話にならんな……大口たたくからもう少しまともな選手が出てくると思ったが。」

「……どうですかね。まあ確かに……まともじゃないかもしれないスね……でも……」

黒子を知る黄瀬だけは笑みを浮かべてそう言ったが、白崎を見て顔を曇らす。

「まともな試合にはならないかもしれないっスね……」

残念そうな顔で言った。

「……」

「どしたんスカカントク……?」

「(……あらら……!?!?ちよいと……ヤバくね!?)」

カントクは海常のメンバーを見て表情を引きつらせた。

「(服の上からじゃ全部は視えないけど……てか軒並み数値高つけえ……フィジカルは完全負けてるか……)」

「……正直、さすが全国クラスってカンジね……」

そして試合は始まり、ボールは海常チームの手に渡った。

「っし！んじゃまず一本！キツチりいくぞ！」

次の瞬間、黒子が4番の持っていたボールを弾きボールを奪い取った。

「なっ………にい………!!?」(どっから湧きやがったコイツ　!!!?)

ボールを持った黒子を4番がすぐに追いかける。

「(………っと思ったらなんだ………コイツ遅せえ!!)」

前に回りマークしたが、黒子はすぐに持っていたボールを隣にいた火神へとパスした。

「あ!？」

「(くらえ!!)」

バキヤ!

火神は飛び上がり、一発目からダンクを決めた………だが、妙な音も聞こえた。

「お?」

くNGシーンく

「どーするって……まず謝ってそれから……すみません、ゴール壊れてしまったんでもう片方のコート使わせてもらえませんか。」

「どうせならさっきの仕返しに反対側のゴールも破壊するか……
火神、やれ。」

「オレかよっ!?!?」

「最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる」(後書き)

NGシーンあんまりおもしろくないかな？次回、黄瀬参戦！

「勝てねエへぐらいがちよどいい」(前書き)

二人の弱点発覚です。

「勝てねェぐらいがちょうどいい」

火神がゴールを破壊したため、コートを全面使う事になった。

「何？結局全面使うの？」

「ゴールぶっ壊した奴がいんだってよ！」

「はあ？……………うお！マジだよ！！」

一時試合を中断し、コートの整備が行われてた。

「確かにありゃギャフンっスわ。監督のあんな顔初めて見たし。」

「人ナメた態度ばっかかってっからだつとけ！」

「火神君……………ゴールって……………いくらするんですかね？」

「え！？あれって弁償！？」

「とんでもないことしたな……………新品で7桁いくぞ。」

白崎の言葉に火神は絶句した。

「マジ！！？」

「まあ、リングだけ交換できるなら高くはないし、今回は整備不良のものを使わせたあちらの責任だろう。」

その言葉を聞いて火神は安心した。

「驚かせんな！！つて、なんでそんなコト知ってんだよ？」

「中学時代に頻繁にどこかのバカが破壊して、監督に泣きつかれたからだ・・・」

火神の疑問に黄瀬をにらみながら答えた。黄瀬は目をそらした。

「黄瀬！ちよつと来い！！」

「呼ばれてるから行くっス！またアトで！！」

これ幸いと走っていく黄瀬に向けられる視線は冷たかった。

ピーッ

「それでは試合再開します。」

コート整備が終わり、ようやく試合再開となった。

「やっと出やがったな・・・」

「スイッチ入るとモデルとは思えねー迫力だすなオイ。」

「・・・伊達じゃないですよ、中身も。」

「（改めて視ると・・・バケモノだわ・・・黄瀬涼太・・・）」

黄瀬の数値を見たカントクは目を見開き驚くしかなかった。

「キヤアア黄瀬クーン!!」

コートには黄瀬ファンと思われる女子の黄色い声が飛び交っていた。

「うおわ!? なんじゃい?」

「あーあれ? アイツが出るといつもつすよ。」

「・・・てゆーか、テメーもいつまでも手とか振ってんじゃねーよ

!?!?!」

「いてっ、スイマツセーんっつ。」

いつまでも手を振る黄瀬にイラついた海常の主将、笠松幸男は思いっきり足蹴りした。

「シバくぞ!!」

「もうシバいてます・・・」

「てゆーか今の状況分かってんのか黄瀬ー! あんだけ盛大なアイサツもらったんだぞウチは〜」

「いてっ、いてっ。」

足蹴りから追い討ちをかけるように笠松は黄瀬に肩パンを何度も繰り返す。

「キツチリお返ししなきゃ失礼だろが！」

そして試合は始まり、ボールは黄瀬の手に渡る。

「こつちもアイサツさせてもらっつスよ。」

「……………!!!(コイツまさか!?)」

ガシャ!

先程の火神と全く同じプレイで黄瀬はダンクを決めた。

『おおおおお!!!』

「バカヤローぶっ壊せつつたろが!!まだくつついてんよ!!!」

「いって、スイマッセン！」

『(えええええ~~~~!!!?)』

どうやらゴールを壊してほしかったらしく、笠松は黄瀬に再び足蹴りした。

「試合ができなくなるでしょう……………」

「そんなときはコイツに謝罪させるつもりだったからな、蹴ってから。」

「どつちにしる蹴られるんスね!?!」

「（いや、威力はオレより……）」

ギシギシと揺れるゴールを見れば、火神より黄瀬の力が上だとわかった。

「女の子にはあんまつスけど……バスケでお返し忘れたことはないんスわ。」

「上等だ！！黒子オよこせ！！！」

黒子はボールを火神へとパスを回す。

「んおっつ、やべっ」

「~~~~~!!?」さっきからどっから出てくんだコイツはー!!?」

『おおー!!』

「こっちも全開でいくぞ!!！」

これを引き金に、点の取り合いが始まった。

「（ちよっ、なによコレ……）」

「なんなんだ一体!?このハイペースは!?!」

「まだ始まって3分だぞ!?!」

試合は異常な程にハイペースだった。

「（こんなの……ノーガードで殴り合ってるようなもんじやない……！DFは当然全力でやってる……ただそれよりお互いの矛が強すぎる……！！それに……）」

「くっ！」

「なにやってんだ白崎……！！！」

持っていたボールを弾かれ、奪われる。

「（予想外なのは白崎君……スペック上は黄瀬君と火神君に次いで高いのに、動きは平凡以下……あの先読みの指示もない、どうして!?)」

ダムッ

「後ろにファイダウェイ!？」

火神はシュートを放つが、それを黄瀬に阻止された。

「なっ……!？」

キュッキュッダムッ……

「（ファイダウェイ……やはり返してきますか）」

火神がムキになって挑めば挑む程、黄瀬はそれ以上の力で返してくる。

このままではついていくので精一杯……ギリ貧になるだけ。

「誠凜T・Oです。」

いいタイミングでT・Oが入った。

誠凜のメンバーはかなり体力を消耗し疲弊していた。

「（みんなまだ5分とは思えないほど疲れてる……ムリもないわ、攻守が替わるスピードが尋常じゃない!）」

「とにかくまずは黄瀬君ね。」

「火神でも抑えられないなんて……」

「もう一人つけるか?」

「なっ……ちよつと待ってくれ……ださい!」

「ださい……?」

敬語が苦手らしい火神はおかしな日本語になっていた。

「……いや、活路はあります。」

「封じる手は……ある。」

黒子と白崎の言葉を聞いて全員の視線が集まる。

「彼には弱点がある」

手の内を知り尽くす二人の言葉が重なった……

「弱点……!？」

弱点があるという言葉に全員が二人に釘づけとなった。

「なんだよ、そんなのあんたら早く……」

「いや……正直、弱点と言えるほどじゃないんですけど……」

「それよりもすいません、もう一つ問題が……」

「すみません、私も言っておくべきでした。」

「え？」

「予想外のハイペースでもう効力を失い始めてるんです。」

「もう少し時間をもらえなければ動けません。」

「……!？」

一方海常でも黒子と白崎の弱点が語られていた。

「彼のミスディレクションは40分フルには発動できないんす。」

「ミスディ……何!？」

「11番のカゲの薄さは別に魔法とか使ってるわけじゃなくて……ザックリ言えば他に気をそらしてるだけ。一瞬ならオレでもできます。オレを見ててください。」

黄瀬が片手に持ったボールを上へと放り投げると、笠松の視線はボールへと移る。

「ホラ、もう見てない。」

「あ!」

「黒子たちは並外れた観察眼でこれと同じことを連続で行って消えたと錯覚するほど自分をウスめてパスの中継役になる。まあ、やんなくても元からカゲはウスいんすけど……けど、使いすぎれば慣れられて効果はどんどん薄まっていくんす。」

「なるほどな……」

「それにこれから気をつけるのは白崎っちの方っす。」

「白崎って……あの15番か?そんな警戒するほどじゃないだろ。」

笠松は白崎を思い出す。容姿には驚いたがプレイは平凡以下……危機感を持つには実力不足だと思った。

「それはっすね……」

黄瀬は海常メンバーに白崎の能力を説明する。するとどんどん険しい顔に変わっていく。

「とんでもねーなオイ・・・けどなんでそれを使わなかったんだ？」

「白崎っちは先読みっていうほど余裕を持って事前にわかるんじゃないんすよ。常人離れた目と動体視力と反射神経で、筋肉の動きや力の向き・強さを『見て、一瞬で判断・計算して行動できる』らしいっす。簡単に言うると見た情報を使って一瞬でどうなるかを判断できるってことっす。」

「だが、その情報を集めるために時間がかかるってトコか？」

笠松は予想した弱点を黄瀬に確認する。それにうなずいて

「相手の5人全員の筋肉の動きやクセを覚えるなんてできたとしてもスゴイ集中がいるっす。それこそほかのことに意識を向ける余裕がないくらいに。だから覚えるまでの白崎っちはほとんど集中できてない足手まといと同じなんす。」

そして誠凛でも二人の弱点は語られ、それを聞いたカントクに二人はシメられていた。

「そーゆー大事なことは最初に言わんかー！！」

「すいません、聞かれなかったんで・・・」

「監督命令で出ると言われたので……………」

「聞かな何もしゃべらんのかおのれらはー!!」

二人からメキメキとイヤな音がでる。

「(でも私もウカツだったー!!こんな反則技がノーリスクでやれるって方が甘いわ……………!!)」

「T・O終了です!!」

更に追い討ちをかけるかのようにT・Oの時間が終了。

「あー!!黒子君と白崎君シバいて終わっちゃったー!!」

「このままマーク続けさせてくれ……………ださい。もうちょいで何か掴めそうなんス。」

「あつちよ待つ……………火神君!」

カントクの話最後まで聞かず、火神は先にコートの中へと戻っていく。

「もう!……………とにかくDFマンツィーからゾーンに変更!中固めて黄瀬君来たらヘルプ早めに!黄瀬阻止最優先!!」

『おっ!』

「あと黒子君はちょっとペースダウン。思いきり点差引き離されな

い程度に。できる?」

「やってみます。」

「白崎君はプレイに集中して。覚えるのに使う時間は最小限でできる?」

「難しいかもしれませんが・・・無意識レベルで覚えることに集中してしまいそうですから・・・」

「ああ、もう!じゃあベンチから覚えることは?」

「できます。目の前で見られたのでそんなにかからないかと。」

「わかった。メンバー交代お願いします!水戸部君、行って!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(じくっ)」

それを聞いて白崎は水戸部と交代した。

キユツキキユツ

「(あーもーいきなりズツコけたわ~~~~)。まだ第1クォーター途中で2コ目のT・O使うなんてバカすぎてできないし・・・・・・」

カントクは目に涙を浮かべながらガツクリと肩を落としていた。

「お?」

キユツ……………

「お、中固めてきた……………!」

「(てかほぼボックスワンだな。10番をみんなでフォローしてとにかく黄瀬を止めようってカンジか)……………やんなるぜまったく。」

ヒュツ

パツツ

笠松はそこから飛び上がり、3Pを決めた。

「おお、一蹴の3P!」

『いいぞいいぞ笠松!!いいぞいいぞ笠松!!』

「海常レギュラーナメてんのか?ヌリいにも程があるぜ。」

『ディーフェンス!ディーフェンス!』

「くつ……………」

キキユツ

バシツ!

火神は黄瀬に抑えられ、黒子はミスディレクションの効力が弱まっているせいで相手にボールを弾かれる……………流れは明らかに

海常だった。

「なるほど……少しずつ慣れてきたかも……」

「くそ……」

「ジワジワ……差がひらく……」

「20 - 35……（流石にキツイ……）」

バシッ！

「ぐっ……」

「アウト・オブバウンズ！！白ボール！！」

「……そろそろ認めたらどっスか？今のキミじゃ「キセキの世代」に挑むとか10年早えっスわ。」

「なんだと……!？」

「白崎つちが出なきゃこの試合、もう点差が開くことはあっても縮まることはないっスよ。」

「……」

「チームとしての陣型や戦略以前に、まずバスケットは「体格のスポーツ」。誠凛と海常じゃ5人の基本性能が違いすぎる。唯一対抗できる可能性があったのはキミっスけど、だいたい実力は分かったっス。潜在能力は認める。けどオレには及ばない。キミがどんな技をやる

うと見ればオレはすぐ倍返しできる。どう足掻いてもオレには勝てねえよ。白崎っちにしてもオレが相手じゃ見極めるのに時間がかかる。その前に追いつくための時間が足りなくなる。ま……………現実には甘くないってことスよ。」

「く……………つ。」

まさに八方ふさがりの状況。だが……

「クツクツク……………ハツハ……………ハハハハ……………

……………!」

突然笑い始めた火神に全員が目を見張った。

「フリーフリー、ちょっと嬉しくてさア……………そーゆーこと言ってくれる奴久しぶりだったから。」

「……………!」

「アメリカじゃそれがフツーだったんだけどな。」

「え!? アメリカいたの!? すごいっつ。」

「日本帰ってバスケから離れたのは早トチリだったわ。ハリ出るぜマジで。やっぱ人生挑戦してナンボじゃん。強ええ奴がいねーと生きがいになんねーだろが。勝てねエぐらいがちようどいい。」

「それじゃ負けるのではないか?」

「まだまだ!これからだろ!聞いてねえゴタク並べんのは早えーん

じゃねーの？……おかげでわかったぜオマエの弱点。」

「!?!」

「自分から言い出しづらかったのもちよっとわかるわ。」

火神はキョロキョロと周囲を見始めた。

「火神、右斜め後ろ。」

「サンキュー、見ればできる？見えなかったら？そもそも元からウスイのが前提じゃ、やれって方がムリな話だろ。」

白崎に言われた方を見て、目的の人物である黒子を見つけるなり火神は黒子の首根っこを引っ掴んだ。

「いくら身体能力が優れてるオマエでも、カゲを極限までウスめるバスケスタイルだけはできない。……つまり、コイツだろ！オマエの弱点！」

「何すんですか。」

ようやく見えた突破口……ここから誠凛の逆襲は始まる。

くNGシーンく

「 』

「勝てねエぐらいがちょうどいい」(後書き)

白崎がカツコ悪い・・・期待してくれた方すみません。もう少しあとで活躍します。

次回、誠稟反撃開始。

キャラ設定(前書き)

今回はキャラ設定です。

キャラ設定

名前 シメタカ 白崎 ハクジマ 誠

身長 188cm

体重 75kg

血液型 O型

誕生日 7月11日（蟹座）

利き腕 両方

ポジション コンボガード CG

容姿 白髪で赤目

一人称 わたし 私

元 帝光中学バスケットボール部 背番号10 「神の守護者」

現 誠凛高校バスケットボール部 背番号15 1-A 12番

「キセキの世代」と同等の力を持つ「神の守護者」。相手の動きを見切り、試合を掌握するのが得意。

年上や親しくない相手には敬語を使うが、信用した相手には口調を崩し容赦がなくなる。

冷静で理知的な性格。沸点も高く、本気で怒ることは滅多にない。・が、本気で怒るとメチャ怖い。「仕方ない・・・」「はスポーツ選手として」が口癖。そのため帝光時代は選手たちの親のような存在になっていた。

「最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる」を座右の銘として、「完全勝利」を目指す。自身の体作りや相手の戦力分析に

も力を入れる。早寝早起き（乾布摩擦付き）を行い、ジャンクフードを嫌うため火神にジジイ扱いされた。（本人は強く否定）

能力・技

「アナライズ・アイ完全分析の目」（初登場・「黒子はボクです」 「白崎は私です」
・・・」 VS 誠凛バスケット部二年生）

常人離れた目と動体視力・反射神経により、筋肉の動きや力の向き・強さを『見て、一瞬で判断・計算して行動できる』力、ほぼ100%の的中率で敵味方の動きを把握できる。主にこれを使ってプレイする。

弱点・・・動きを記憶するまで集中力が極端に低下、まともなプレイをすることができない。

キャラ設定（後書き）

話が進むにつれて更新していきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月29日14時53分発行